［随　想］

我が青春への思い出の旅

上野山 信一

私は５月25日から５日間の予定で、妻と長女の３人連れで、以前から念願のシンガポール・マレーシアの旅に出ました。それには私自身別の期待と目的（フィリッピン戦線で戦死した、かっての級友の冥福を祈ること）があった次第です。

当日関西空港発のシンガポール行きJAL721便に搭乗し、シートベルト着用のサインが出てまもなく出発。幸いその日は好天に恵まれて視界良好、徳島市上空・高知足摺岬を遥か眼下に眺め一路機は南下し、約３時間後ルソン島マニラ上空に達しました。

コバルトブルーに輝く珊瑚礁の海、ジャングルに覆われた青い島々、ほんとうに絵のような景色に見いっていました。しかしその美しい島々は昔日本が敗色濃い昭和19年に、私が初年兵でフィリッピン戦線に参加したあの島、あの海です。

丁度21才の時、この海で上陸用舟艇に乗って輸送船から軍需物資の揚陸作業（空襲下）、また米比ゲリラ部隊との戦闘で決死の日々が続き、もう二度とあの懐かしい故郷の土を踏むことはないと覚悟を決めておりました。

そんなある日突然（昭和19年８月米軍上陸の１ヵ月程前）内地の幹部候補生学校に入校を命ぜられ帰還することとなり、小学校当時の同級生二人の戦友とも別れ、私自身は内心嬉しさ一杯で内地の土を踏むことができました。たまたま帰りの便船は、連合軍捕虜を約千名乗せた高速輸送船だったために、敵の潜水艦の攻撃をうけず無事だったわけです。

二人の級友は戦死し遂に還らぬ人となりました。今日機上から友のご冥福を祈り、当時のことに思いを馳せるとき誠に感無量、人の運命をつくづく感じさせられた一時でした。こんなことを考えているうち、機は無事シンガポールに到着し、予定どおりの日程で楽しい旅も終わり、５月30日やっと岡山に帰りました。

シンガポールの感想は次のとおりです。

(1) 緑が多く街並みが大変美しい。

(2) 日本人観光客ばかりで、観光地で日本語のガイドを聞いていると日本と錯覚をおこす。

(3) 通貨は日本の千円札が何処でも通用するので、日本円の強さを再認識した。

(4) 日本車のホンダシビックが千二百万円位する（政府が車を増やさない方針で関税をかけているため）。

さて私はこの田中野田に居を構えてもう20数年が経ちましたが、その間自分の仕事、子供達の教育等に追われ、町内の事等には全く無関心でした。ほんとうに恥ずかしい思いです。しかしこれは町内の役員になって初めて理解できることではないでしょうか。現在、女房と二人で老後の生活（？）に入っているわけですが、いつまでも健康であって、歌の文句じゃないが“川の流れのように”、淡々と物事にかかわらず、和の心で生きてゆきたいと思っております。この町を住みよい美しい町として、次の世代に贈ることが私達の責任ではないでしょうか。そんなことを考えております。

［連　載］

わが郷土を語る（その２９）

中尾　佐之吉

昔の住生活をふりかえって（その2）

前号では、この地方の住生活で昔から「イロリ」が使われていなかったことを書かせてもらった。今回はどこの家にも畳が敷かれていたことを書こうと思う。洋間ならともかく“和室に畳が敷かれている„ あたりまえのことではないかと思われるであろうが…

1）昔の農家は、畳生活が一般的ではなかった

イ）山口県、周防大島の話

宮本常一著「家郷の訓」につぎのような記事がある。

「今でこそ床板の上に畳を敷き布団にくるまって寝るまでの生活になっているが、その頃（明治１２・３年ー１７・８年頃）は竹の簀の子でその上に筵をしき、寝るときに莫蓙をしき身体のうえにうすい布団をかける程度であった。冬分はいろりに火をたき、いろりのそばで背中をあぶりながらごろりと寝たという。これは私の家だけでなく貧しい家の一般の風だった。」

ロ）司馬遼太郎氏の著書では

「江戸末期の百姓家は床も張ってない土間にわらを敷いて生活していた」との記事もある。（「日本歴史を点検する」より）

ハ）また、身近な「備前藩百姓の生活」（荒木祐臣著）の本では

「百姓たちの住宅は極めて粗末な藁葺きの田の字形間取りの住宅で、入口にはきまって牛屋を置いていた…田の字形の間取りは座敷・下の間・勝手・なんどの四間であるが、畳が敷いてあるのは座敷だけで他の三間は粗末な筵敷で勝手の間のいろりを囲んで家族たちは食事をするのだが…」という記事がみられる。

なお、住宅の建築には松材を主体とし杉・檜などの上級材は使ってはならないとか、屋根は瓦でなく藁屋根にせよ、さらには、畳の表替えまでお役人にうかがいをたてねばならないなどの“お触れ„ も備前藩から出ていたという。

2）この地方では、農家でも畳が敷かれていた

この地方の農家で、明治以前に建てられそのままの形で現存するものは皆無であるが、私が子供の頃（私は大正６年生まれ）には、当時のわが家もそうであったが“わら葺„ 屋根の家もすくなくなかった。これらの家は、明治以前の建築と思われ、大抵の家が田の字型四間つずき主体の間取りでそれに広い土間や厩があった。しかし、畳はどの部屋にも敷かれていた。筵を敷いている家はなかった。そして、家の床の構造からして最初から畳が敷かれるようにできていたとしか考えられない。

それに、この地方が江戸中期以降い草の栽培が盛んになって、畳表を使用することは自給自足だから“贅沢だ使ってはならない„ とお役人もいわれなかったのだと推測する。（早島町の歴史民俗資料館の同町歴史年表によると、元禄時代ー1700年頃、庶民の家にも畳が敷かれていたとある。）

3）むすび

この地方では昔から畳の生活であったといばるつもりは毛頭ない。この地方にい草が作られる以前は、周防大島の住生活と似たようなものであったろう。

そして、このような生活は農家ばかりではなかった。貧乏旗本の家に生まれた勝海舟の若いときは、かやも布団もなく椽（えん）を破り柱を削ってご飯を焚いたことがあったという。なお、蘭学者で画家の渡邊崋山は、田原藩（１万２千石）の家老筋の家柄ながら、少年時代の一家はどん底生活で夜も布団らしいもののないところで寝たという。（「勝海舟伝」より）

上下水道が完備し、冷暖房設備も整い、照明から炊事・洗濯まで住生活のあらゆる面で電化（部分的ガス化）された現代生活の状況は、前世紀（半世紀と言っていいかも知れない）以前の住生活とはあまりにも差がありすぎて比較もできない。もう，家に畳が敷かれていたとか敷かれてなかったとか、イロリがあったとかなかったとかは問題でない。“往時の庶民の生活はあまりにも貧しかった„ と総括するしかないように思う。

ところで、この記事を書きながらふと私の幼い頃を思いだす。その頃、真夏の夜がむし暑いので、夕食後どこの家でも一畳台をだして夕涼みをしていた。また、隣家の涼み台にもよく遊びに行った。そして、そこのおじいさんから戦争（日露戦争）の話やら、火の玉が飛ぶ怖い話などを聞かされたことを。

いまは、蚊もいないし部屋にはクーラーもあって、近所の人との夕涼みも、カヤの中へ寝ることもなくなった。私は、今の平和で豊かなよき時代を生きさしてもらいながらも、なお、昔を懐かしく思う歳なのである。

―― ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ――

あとがき：　町内会新聞のありかたについて、役員の間で検討しています。ともかく、皆んなに読まれることが最も重要です。町内の機関紙である以上、町民への情報伝達の役割りもあります。しかし、これの比重が大きいと、内容が味気ないものになりがちです。そこで皆さんのいろいろな声を聞かせてもらい、情報交換の場としたく、試みとして本号は「花いっぱい運動」の特集としました。３名の方には玉稿を寄せていただき、ありがとうございました。本紙の編集方針についてはまだ試行錯誤が続きますが、ご協力をお願いします。